

IV 成果と課題



【1年生総合的な学習の時間にゲストティーチャーに来て頂きました】



【2年生総合的な学習の時間には、地域の事業所へ職場体験にいきました】



【3年生総合的な学習の時間では、学習してきたことを小学生に発表をしました】

成果と課題

(1) 学校評価アンケートによる成果と課題

今年度の学校評価アンケート結果から昨年度と比較し、成果と課題をまとめることとした。

本校の学校経営重点計画の柱である、「言語活動の充実」、「開発的生徒指導」に関連した質問内容について、次のような結果が出ている。

○ 生徒アンケート①～④より

「言語活動の充実」に関する項目①・②では、肯定評価が大きく伸びている。生徒自身、考えたり伝えたり、比較しながら聞いたりすることができるようになったと実感しているようである。「開発的生徒指導」に関する項目③・④でも、肯定評価は伸びている。特に、1学年の肯定評価は85%にも達しており非常に高かった。

○ 保護者アンケート⑤～⑦より

「言語活動の充実」に関する項目⑤では、伸びが大きく、学年別に見たところ学年が上がるにつれて肯定評価が伸びていた。「開発的生徒指導」に関する項目⑦において9割を超えた。

成果

- 本校の言語力のめあて表を柱に据えた研究が3年目をむかえた。学級掲示や授業者の取り組みが結果を出したものと思われる。
- 生徒が、「筋道立てて考えることができるようになった」「上手く伝えることができた」と実感がもてる評価（ほめ・励ましの言葉）を返すことができていると考えられる。また、保護者の結果から、この力が家庭でも活かされていることが伺える。
- 昨年度12月より全教職員で実施してきた「いいところ見つけ！」カードの配付などが、自信を付けた生徒や学校へ行くのが楽しみだと感じる生徒の増加につながった。
- 昨年度は、教師2人分のコメントがカードに出てくるだけだったが、今年度は、教師4人分のコメントを1枚のカードに集約することができるように改良したため、複数の教師からコメントがもらえるようになった。

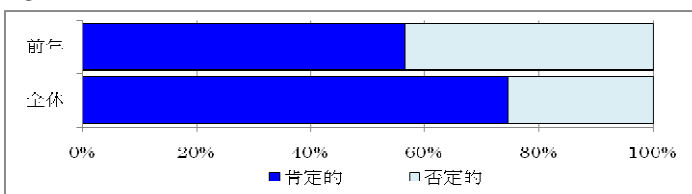
課題

- 教師アンケートの結果からは、言語力のめあて表を視点に入れた学習指導を進めている教師は60%強となっており、全体には浸透していないようである。また、教科の特性もあるので言語力のめあて表の活用にあたっては、教科会などで深めていかなければならない。

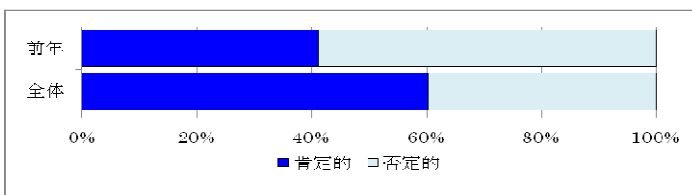
肯定的：よくあてはまる・ややあてはまる

否定的：ややあてはまらない あてはまらない

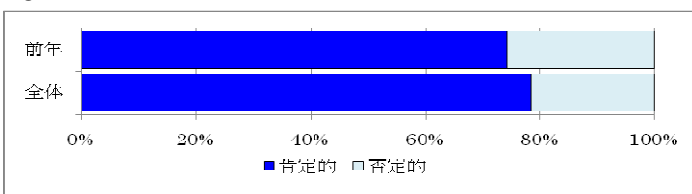
① 順序立てて、ものごとを考えることができる。



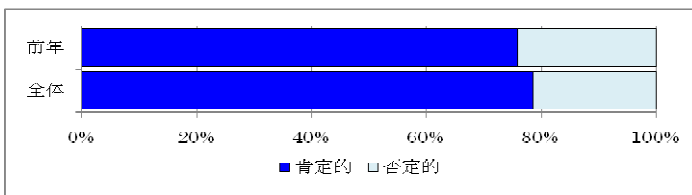
② 自分の考えや意見を相手に分かりやすく伝えることができる。



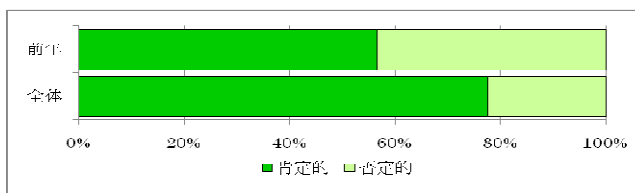
③ 自分はやればできると思う。



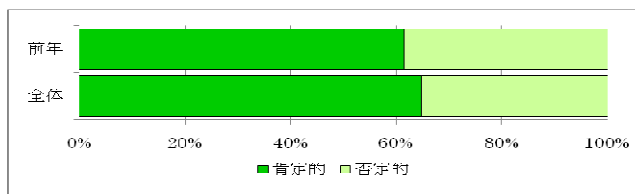
④ 先生は学校のいろいろな場面で励ましたり褒めたりしてくれると思う。



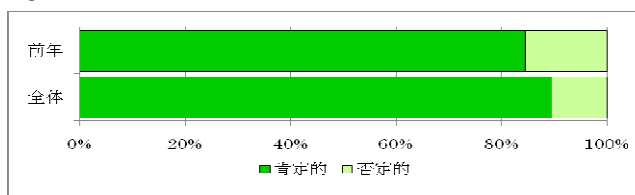
⑤ 子どもは筋道を立ててものごとを考える力が身に付いてきていると思う。



⑥ 子どもは自分の考えや意見を相手に分かりやすく伝える力が身に付いてきていると思う。



⑦ 子どもは学校に行くのを楽しみにしていると思う。



(2) 授業・学級づくりからみた成果と課題

成果

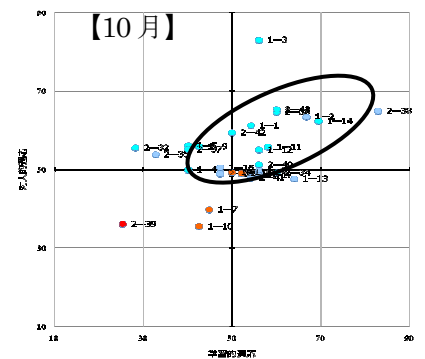
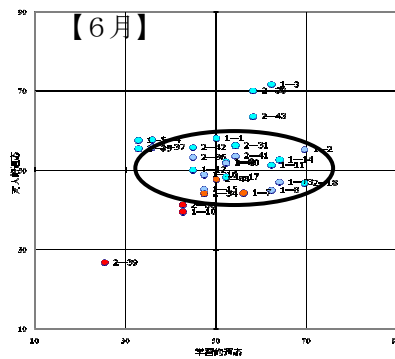
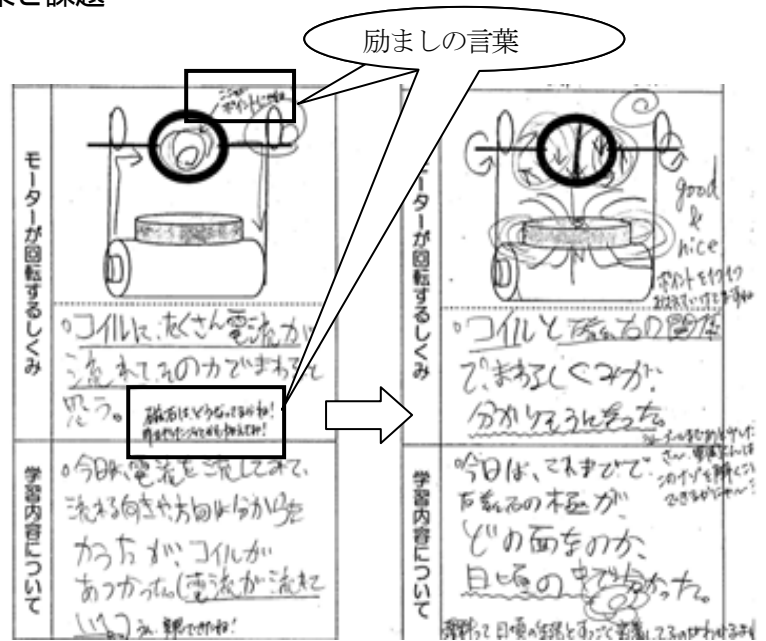
- ・ 教科会を毎月もつことで、今年度の研究の取り組みであるノートを取り方や来年度実施新学習指導要領における評価規準等を教科内で共有することができた。
- ・ 形成的な評価（「励ましの言葉」）を返すことで、単元の目標達成へと方向付けることができた。

【右図：理科の授業例】この単元の目標は、磁力線の相互作用を見出し理解することである。ワークシートの記入から、生徒Sは、コイルの周りにできる磁力線が曖昧だということが把握できた。

次の実験でコイルの周りにできる磁力線

線について確認することを意識づける励ましの言葉を、教科担任が記入して返した。この実験後、コイルの周りだけでなく磁石の磁力線についても正確に記入することができた一例である。

- ・ 今年度は、「いいところ見つけ！」カードをベースとする、生徒同士が認め合うカードの掲示が増加した。また、学級内にとどまることなく、「あらゆる場面で」「どの生徒にも」の実践が広まってきている。
- ・ 「いいところ見つけ！」カードをベースとした掲示物によって、クラスの中で自分が認められていることの喜びや学習への意欲につながる内容を五行日記に記入する生徒が出てきた。
- ・ 若手教師が、授業の空き時間に意欲的に様々な先生方の授業観察を行うことが増えており、教師自身学ぶ意欲が高くなっている。
- ・ 今年度、6月・10月と2回の学級集団アセスメント調査を実施した。1回目と2回目の「学習的適応感」「対人的適応感」の尺度を比較すると全体的に上がってきていることが分かった。1回目の調査において要支援領域の生徒がどの学級にも見られたが少しずつ上昇してきていること、生活満足度の低い生徒が減少してきたことが分かる。



学級集団アセスメント調査

課題

- ・ 授業での、生徒の様子を見取って授業の課題を協議する研究授業を推進していたが、授業者の授業方法について協議する方向へ流れる傾向があった。
 - ・ 研究授業では、授業を受けた生徒一人一人に対してほめ・励ましのカードを配付することができたが、これまでのカードの内容は、幅の広い内容についてのほめ・励ましとなっていた。カードへの記入内容が、「思考力・判断力・表現力」の向上にかかわるものになるよう、焦点化していく必要がある。
- また、このカードの内容を通知表等にどのように反映していくかが今後の課題である。